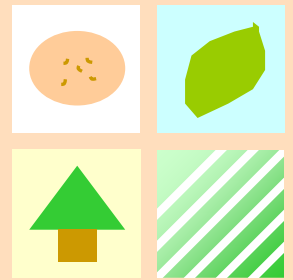




長 崎 県 総合農林試験場 ニュース



Nagasaki

Agricultural and Forestry Experiment Station's News

No. 68 2005.3

研究の成果

- 乗用型管理機に対応した茶の樹形仕立て直し法 2
- キンギョソウの年内開花後の夜温管理による3月開花栽培法と適品種 3
- 人工ほだ場における樹種別、種菌別の散水によるしいたけ増収効果 4
- 牛ふん堆肥の簡易品質評価法 5

研究トピックス

- 水稻早生有望品種「ふっくらももこ」の栽培特性 6
- 諫早湾干拓における露地野菜の減肥栽培の取り組み 6
- クロタラリア全量鋤込みによる年内どりレタス及び秋作バレイショに及ぼす窒素供給効果 7
- 島原半島地域におけるマメ科緑肥作物クロタラリアに関する農業者の評価 7

場内だより

- 主なできごと 8



連覇を祝い、 諫早高校駅伝部を激励

(平成17年1月6日)

全国高校駅伝大会で3年ぶり2度目の優勝を果たした、諫早高校駅伝部を激励するため、諫早湾中央干拓試験地で栽培された野菜を「元気をつけて」とエールとともに贈りました。

分野別課題評価委員会（農林）

(平成17年1月11日)

総合農林試験場で分野別課題評価委員会が開催されました。農林分野の試験研究課題のうち、終了・継続課題について、評価委員6名による検討・評価が行われました。評価委員は、農業団体、大学、農業者、県民代表の方々です。





乗用型管理機に対応した茶の樹形仕立て直し法

東彼杵茶業支場研究員 森川 亮一

E-mail : morikawa1@pref.nagasaki.lg.jp

1. 研究の背景・ねらい

県内の茶園では、一人で作業が行える乗用型管理機（摘採機・中切り機・防除機など）の普及が進んでいます。その導入数は、ここ数年で著しく増加し、大幅な省力化が図られています。

また、機械化に適した茶園の造成、整備も行われています。茶樹の樹形（摘採面の形）も従来の可搬型管理機と乗用型管理機の刈り刃のRが違うために、現在の弧状畦から乗用型機にあわせた水平畦に仕立て直す必要があります。

乗用型機を導入する場合、全茶園を乗用型機に合わせて樹形仕立て直しをすることになり、更新処理によって減収が伴います。

そこで、乗用型管理機に対応した減収の少ない仕立て直し法を検討しました。

2. 成果の内容・特徴

- (1) 二番茶後の深刈り処理による樹形仕立て直しは、処理当年の二番茶生葉を収穫することができ、翌年以降の一・二番茶収量が多く、芽揃いも良いことがわかりました（表2、図1）。
- (2) 一番茶後の中切り処理による樹形仕立て直しは、中央部の枝は太く、裾部の枝は細いため、翌年の一番茶芽の芽数が違い、不均一になります（表2）。
- (3) 弧状畦を水平畦に仕立て直しをすると、樹冠面の裾部に刈り残し部ができます。この刈り残し部が多いと処理後に水平面に達するのが遅れ、翌年の生葉収量が減少します（表3、図1）。

3. 成果の活用面と留意点

- (1) 中切り更新及び深刈り更新処理には、乗用型中切り機を使用してください。
- (2) 仕立て直し処理は、計画的な更新サイクルの組み立てが必要です。

表1 試験区の構成(2001年)

区No.	試験区	仕立て直し 処理年月日	処理前 樹高(mm)	処理時の 刈刃高(mm)
1	一番茶後中切り	5月18日	813	500
2	一番茶後深刈り	5月18日	814	600
3	二番茶後深刈り	6月26日	851	600
4	二番茶後浅刈り	6月26日	825	700
5	対照弧状(無処理)	—	—	—

注) 供試茶樹：試験開始時「やぶきた」28年生
年間窒素量：45kg/10a

表2 仕立て直し処理翌年の一番茶生葉形質

区No.	調査部位 (畦の部位)	摘芽長 (cm)	摘葉数 (枚)	百芽重 (g)	芽数 (本/m ²)	出開度 (%)
1	東側	7.1	3.3	69.7	988	58.2
	中央	6.3	3.2	68.8	663	56.6
	西側	4.5	2.9	49.9	1000	65.0
2	東側	3.7	2.6	44.1	838	49.2
	中央	4.9	2.9	50.2	1000	62.2
	西側	4.3	2.9	43.4	975	78.9
3	東側	5.4	3.0	63.4	1025	63.4
	中央	5.0	2.9	51.7	1088	54.8
	西側	5.5	2.8	55.1	1063	45.9
5	東側	3.9	3.0	43.6	1088	75.9
	中央	4.7	3.0	45.3	1063	72.1
	西側	4.8	3.0	45.7	1025	73.2

表3 せん枝できなかつた弧状樹冠面裾部の推移(cm)

区No.	当 年		翌 年	
	処理直後	秋整枝後	二茶後	三茶芽せん除後
1	2.8	0.0	0.0	0.0
2	18.6	0.0	0.0	0.0
3	7.4	0.0	0.0	0.0
4	26.7	23.3	10.3	0.0
5	—	—	—	—

注) せん枝できなかつた弧状樹冠面裾部：
弧状から水平へ仕立て直しの際、刈り刃のRの違いから
せん枝できない裾部片側の幅

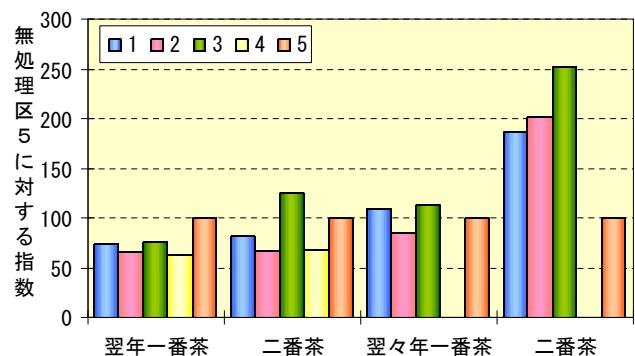


図1 処理翌年・翌々年の生葉収量



キンギョソウの年内開花後の 夜温管理による3月開花栽培法と適品種

作園芸部花き科専門研究員 出口 浩

E-mail : arakabu@pref.nagasaki.lg.jp

1. 研究の背景・ねらい

キンギョソウは、一番花を年内に収穫すると、二番花の開花は価格が安くなる4月以降になります。そこで、価格の安定した3月に二番花を収穫できる栽培法の実証と、その栽培法に適する品種の選定を行いました。

また、新しい栽培法では、12月に一番花を収穫し、3月に二番花を収穫した後、4月から8月までの5ヶ月間を活用して後作を導入することが可能となり、施設の有効利用が図れます。

2. 成果の内容・特徴

(1) キンギョソウの一番花を11~12月収穫した後、ハウスの夜温を15℃に上げ、発蕾まで管理することで二番花の花芽分化を促進

し、3月に開花・収穫することができます(表1)。

(2) この栽培法には、早生品種の「カリヨンサーモン」、「アスリートイエロー」、「メリーランド ライトピンク」等が適します(表1)。

3. 成果の活用面と留意点

- (1) 一番花の収穫時は、二番花となる花芽を確保するため、下位の1節(2芽)を残します。
- (2) 二番花の発蕾終了後は、品質の向上を図るため徐々に夜温を下げます。
- (3) この栽培法は、今年度、長崎農業改良普及センター管内で、現地実証試験を行っています。

表1 キンギョソウの時期別、階級別切り花本数

品 種	月	開花最盛期	階級別切り花本数 (40株当たり)					計	10a本数
			3 L	2 L	L	M			
カリヨンサーモン	12	12/4~15	7本	34本	34本	20本	95本	57000本	
	1		0	0	0	0	0		
	2		0	0	2	1	3		
	3	3/16~24	21	29	14	1	65	40800	
		計	28	63	50	22	163	97800	
アスリートイエロー	12	12/6~15	32	41	7	0	80	48000	
	1		0	0	0	0	0		
	2		0	0	1	0	1		
	3	3/24~31	29	26	9	2	66	40200	
		計	61	67	17	2	147	88200	
メリーランド ライトピンク	11		0	5	40	5	50		
	12	11/27~12/1	9	31	18	1	59	48000	
	1		0	0	0	0	0		
	2		0	13	7	0	20		
	3	2/28~3/3	10	53	8	0	71	40200	
	計	19	102	73	6	200	88200		
メリーランド アップルブロッサム	12	12/9~15	34	38	8	1	81		
	1		3	0	0	0	3	50400	
		計	37	38	8	1	84	50400	

注1) 3 L : 90cm以上 2 L : 80~90cm L : 70~80cm M : 60~70cm

注2) 「メリーランド アップルブロッサム」の2番花は3月までの調査期間中には開花しなかった(栽培打ち切り)。

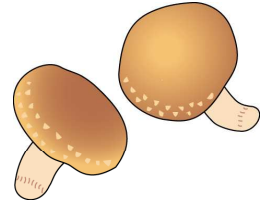
研究の成果



人工ほだ場における樹種別、種菌別の散水によるしいたけ増収効果

林業部森林資源利用科専門研究員 久林 高市

E-mail : kubayashi@pref. nagasaki. lg. jp



1. 研究の背景・ねらい

近年増加している人工ほだ場では、夏期の高温乾燥により収量が不安定になる場合が多いようです。今回、この問題解決のための適切な散水方法及びその効果を明らかにしました。

2. 成果の内容・特徴

(1) 散水方法

散水は頭上スプリンクラーで行い、散水時間は15mm/時で2時間、午後2時開始が、夏期の気温低下状況等から最も適していました（図1）。

(2) 樹種による収量

上記の散水方法では、いずれの樹種でも成形成駒が効果的であることが分かりました。

コナラでは、成形成駒M290・成形成駒K115ともに18kg（ほだ木1本の3年間の収量、1m³当たりの乾しいたけ重量換算、以下同様）以上が得られました（図2）。

アベマキでは、成形成駒K115が14.5kgと多く、クヌギでは、成形成駒M290が15.5kgと多い結果となります。最多収量を樹種別に比較すると、コナラ>クヌギ>アベマキの順となります。

(3) 種菌による収量

通常駒K115は通常駒M290に比べ、しいたけ発生が遅い傾向があります。成形成駒M290は成形成駒K115と比べ、収量がアベマキでは少なく、コナラでは変わらないか上回っています。

(4) 散水处理による収量

成形成駒では、アベマキが効果的です。散水处理の効果は成形成駒K115が大きく、アベマキ、コナラ共に同じです。

3. 成果の活用面と留意点

技術の適用においては、種菌毎に最適樹種やほだ木の管理方法が異なりますので、十分留意してください。



しいたけの発生状況

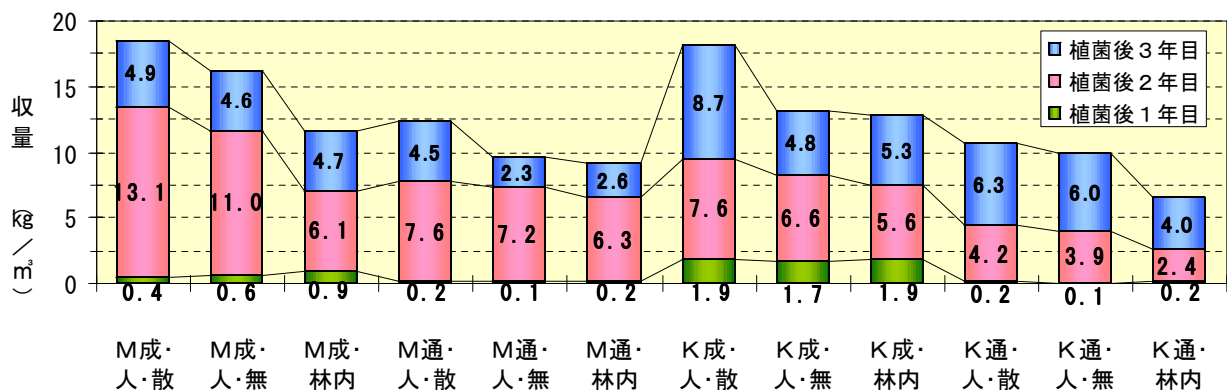


図2 平成12年度植菌の年別収量(コナラ)



牛ふん堆肥の簡易品質評価法

環境部土壌肥料科専門研究員 石井 研至、寺田 光明(現 農産園芸課)

E-mail : ishiken@pref.nagasaki.lg.jp

1. 研究の背景・ねらい

家畜排せつ物堆肥は、従来から農地の重要な土作り資材として利用されています。平成16年11月の家畜排せつ物法により、家畜排せつ物の堆肥化は益々重要性を増しています。

また、農水省の調査結果によると農家の90%が堆肥を利用したいと答えています。しかし、その品質の不均一性が懸念されており、特に、未熟堆肥の施用は農作物への悪影響も危惧されています。

そこで、堆肥の品質評価の一つである腐熟度を調査し、その簡易評価法を検討しました。

2. 成果の内容・特徴

- (1) 現地調査の結果、堆肥は腐熟が進むと、水分、アンモニア態窒素含量、酸素消費量が減少する傾向にあります(表1)。
- (2) このことから、堆肥のアンモニア態窒素含量と酸素消費量を堆肥の品質評価の指標として、各堆肥を施用したコマツナのポット栽培試験を行いました。その結果、堆肥のアンモ

ニア態窒素含量が約150mg/100g乾物以下、酸素消費量が約3 μ g/g/min以下で、初期生育にほぼ生育障害が見られないことが明らかになりました(表1)。

- (3) このアンモニア態窒素含量は、小型反射式光度計(RQフレックス)を利用すると、また、酸素消費量は畜産環境技術研究所が開発したコンポテスターを利用すると簡易に測定することが可能です。

3. 成果の活用面と留意点

- (1) アンモニア態窒素含量を小型反射式光度計で測定する場合、堆肥10gに対してイオン交換水50mlを加え、1分程度振とうろ過して下さい(表2)。
- (2) 豚糞、鶏糞堆肥では、塩基類を多く含むためEC値が高く、この結果が適用できない場合がありますので注意して下さい。
- (3) 今後、廃棄系農産物を有効利用した堆肥などの品質を明らかにするために、さらに研究に取り組んでいます。

表1 家畜排せつ物堆肥の品質調査(現物当り)

畜種	No.	pH	EC (ms/cm)	水分 (%)	アンモニア態窒素 (mg/100g)	酸素消費量 (μ g/g/min)	C/N比	発芽率 (%)	生体重 (g)
乳用牛A	1	8.9	2.3	69.4	245	2	18.3	69	95
	2	9.1	2.2	67.5	133	1	18.5	64	88
	3	9.0	2.5	60.3	30	1	16.9	92	100
肥育牛B	1	8.0	5.4	60.8	733	10	15.3	29	6
	2	8.0	4.7	53.0	761	7	17.2	50	23
	3	8.5	4.7	51.0	95	3	15.7	103	114
	4	8.8	4.5	46.8	119	2	15.0	97	114
養豚C	1	9.0	4.6	37.5	207	2	9.9	100	110
	2	8.8	5.0	29.3	163	1	9.4	97	107
	3	8.9	5.0	27.1	130	2	8.9	95	114
養豚D	1	9.1	5.3	49.2	285	7	13.1	75	50
	2	9.1	5.6	32.6	118	1	11.1	81	76
養鶏E	1	9.2	7.1	32.0	105	2	10.4	39	14
	2	9.1	7.2	30.0	93	2	10.4	58	13
	3	9.3	6.9	27.2	89	1	10.4	52	23
	4	9.5	7.8	20.6	48	1	10.1	65	61

注) No. は大きいほど堆積期間が長い。アンモニア態窒素は乾物当り。発芽率、生体重はコマツナで、対照に対する比率である。

表2 小型反射式光度計法による振とう時間ごとの測定値とブルメナ-蒸留法による測定値との相関関係

振とう時間	30秒	1分	2分	3分	5分	30分
相関係数(R ²)	0.78	0.88	0.82	0.75	0.80	0.67
n数	32	32	32	32	32	32

研究トピックス



水稻早生有望品種「ふっくらももこ」の栽培特性

作物園芸部作物科学研究員 古賀 潤弥
E-mail : j-koga@pref.nagasaki.lg.jp



本県の水稲作付品種は「ヒノヒカリ」に集中し、栽培面積の約7割を占めており、この集中を緩和させるため、その前後の収穫期の品種を早急に選定することが望まれています。

そこで、ヒノヒカリより熟期が早い、良品質、良食味の早生種の有望系統「ふっくらももこ」の栽培特性を検討しました。

「ふっくらももこ」は岡山県農業総合センター農業

試験場で育成された系統です。「どんとこい」に比べ出穂期は同程度、成熟期は3日程度早い“早生の早”です。稈長は同程度で、耐倒伏性は“強”です。千粒重はやや軽く、収量はやや低収ですが、多肥および早植栽培ではほぼ同等です。いもち病には“やや弱”です。外観品質は優れ、食味は「ヒノヒカリ」並の極良食味です。出穂後の高温によって発生する背白粒の発生は少なく高温登熟性が優れます。

表1 移植期と生育、収量、品質

	品種名	出穂期 (月.日)	成熟期 (月.日)	稈長 (cm)	精玄米重 (kg/a)	倒伏	品質
標肥	ふっくらももこ	8.14	9.20	74.3	51.1	0.3	2.3
	どんとこい(標)	8.15	9.23	73.8	54.0	0.2	4.1
多肥	ふっくらももこ	8.16	9.23	77.5	55.0	0.6	3.2
	どんとこい(標)	8.16	9.26	79.0	55.6	0.6	4.4
早植	ふっくらももこ	7.31	9.2	74.6	54.9	0.2	2.1
	どんとこい(標)	7.31	9.4	74.9	56.2	0.1	4.6

注1) 標肥・多肥 : 移植期 6月18日
2) 早植 : 移植期 5月28日
3) 品質 : 1(上の上)~9(下の下)の9段階表示

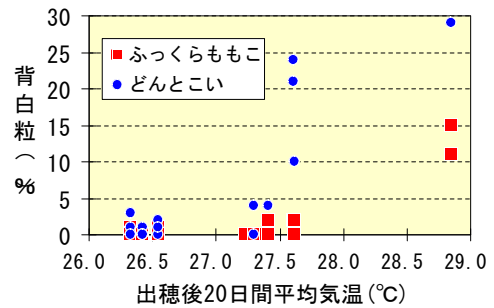


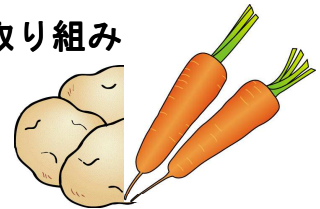
図1 出穂後の気温と背白粒の発生

研究トピックス



諫早湾干拓における露地野菜の減肥栽培の取り組み

企画経営部干拓科学研究員 飯野 慎也
E-mail : iino-shinya772@pref.nagasaki.lg.jp



干拓地の土壌は、保肥力が高い反面、肥効が遅いため、多肥栽培の傾向があります。諫早湾干拓地においては、調整池等の環境に配慮した環境保全型農業を目指しており、露地野菜での窒素施肥量の低減について検討しました。

春作バレイショでは、植溝条施肥の条件下で窒素1.1kg/aで営農計画の目標収量320kg/a以上を得られました(図1)。また冬作ニンジンでは、緑肥作物との輪作及び堆肥施用により熟畑化を促進することで

窒素1.5kg/a(基肥1.2kg+追肥0.3kg)まで減らしても目標収量600kg/a以上を確保できました(表1)。ただし、2作目までは追肥を2~3回必要としますが、3作目以降は多回数追肥の効果が認められないことから、追肥を1回に省き減肥栽培が可能となります。

カリ(K₂O)、石灰(CaO)、苦土(MgO)肥料の施用は必要なく、牛糞堆肥は200kg/a程度施用することが肝要です。

その他の品目についても現在検討しています。

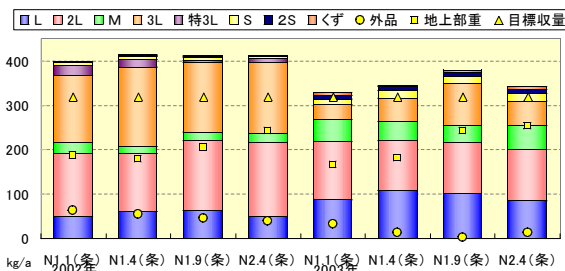


図1 バレイショ階級別収量

表1 ニンジンの窒素施肥量と収量

施肥量(kg/a×回数)			総収量(kg/a)			LM(個数%)			外品(個数%)		
計	基肥	追肥	2001	2002	2003	2001	2002	2003	2001	2002	2003
1.5	1.2	+0.3	748	949	—	76	71	—	0	3	—
1.8	1.2	+0.3×2	864	995	681	78	77	81	3	2	18
2.0	1.7	+0.3	854	962	—	76	72	—	1	4	—
2.3	1.7	+0.3×2	975	1004	705	65	72	85	9	2	11
2.2	2.2	+0.0	809	912	775	70	73	84	0	2	3
2.5	2.2	+0.3×1	776	923	725	67	76	84	6	6	11
2.8	2.2	+0.3×2	888	994	694	74	75	88	6	2	9
3.1	2.2	+0.3×3	892	986	758	75	80	85	4	4	16
3.0	2.7	+0.3	857	935	—	73	80	—	5	1	—
3.3	2.7	+0.3×2	887	996	—	66	76	—	4	1	—

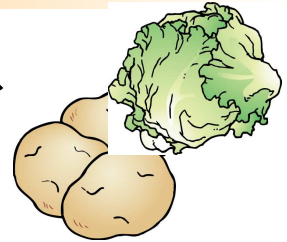
研究トピックス



クロタラリア全量鋤込みによる年内どりレタス 及び秋作バレイショに及ぼす窒素供給効果

環境部土壤肥料科研究員 大井 義弘

E-mail : ooi@pref.nagasaki.lg.jp



本県の露地畑では、夏季休閑中の降雨による土壌流亡防止や土づくり効果のため緑肥を取り入れた作付け体系が期待されています。今回、緑肥であるクロタラリア（種名：ス^レク^レリ^ス）の後作への窒素供給効果を中心に紹介します。

センチュウ抑制効果があるクロタラリアは草丈1m～60cm程度に生長し、茎の中が空洞で鋤込みやすい（図1）、窒素含有率が2.5%程度と、ソルガム、ギニアグラスの0.9%より高い、窒素分解も早く約1ヶ月後で45%分解する（図2）などの特徴がありました。クロタラリアを全量鋤込みし、年内どりレタス及び秋作バレイショを化学肥料慣行施肥で栽培すると、ソル

ガムやギニアグラス鋤込みと収量差はありません。しかし、無肥料栽培にクロタラリアを鋤込むと、レタス・バレイショとも生育がよく、窒素供給の効果は年内どりレタスで1.7kg/10a、秋作バレイショで1.3kg/10a程度と推測できました（表1）。したがって、クロタラリアを10a当たり1トン鋤込んだ場合、0.6kg/10a程度の窒素肥料としての効果が考えられますので、減肥の参考にして下さい。

しかし、クロタラリアを導入するには品種によって特徴が異なることと、湿害や低pHに弱いことが考えられるので、ご注意ください。



図1 クロタラリア（種名：ス^レク^レリ^ス）

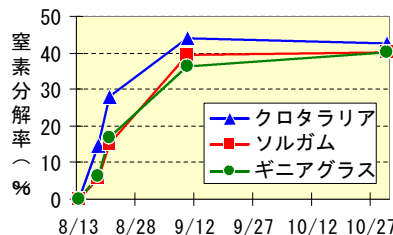


図2 埋設法による緑肥の窒素分解率

表1 年内どりレタス及び秋作バレイショにおける緑肥の窒素供給効果

緑肥作物	年内どりレタス		秋作バレイショ	
	窒素吸収量 kg/10a	緑肥由来の窒素供給量 ¹⁾ kg/10a	窒素吸収量 kg/10a	緑肥由来の窒素供給量 ¹⁾ kg/10a
クロタラリア	3.18	1.7	3.99	1.3
ソルガム	1.58	0.1	2.15	-0.5
ギニアグラス	1.68	0.2	2.57	-0.1
無し	1.48		2.67	

1) 各緑肥の窒素供給量－無緑肥の窒素供給量

研究トピックス



島原半島地域における マメ科緑肥作物クロタラリアに関する農業者の評価

企画経営部経営機械科研究員 土井 謙児

E-mail : k-doi@pref.nagasaki.lg.jp

近年、島原半島地域の畑地帯において、地力維持、線虫防除などを目的にクロタラリアの作付けが増加しています。平成15年に実施した作付けた農家に対するアンケート調査の結果では、次のようなことが明らかになりました。

- ①調査時期：平成15年8月
- ②調査対象：島原半島地域1市16町
- ③回答数：回答数81戸（回収率45%）

- (1) 回答のあった範囲で最も早いクロタラリア栽培は平成10年の15a（1戸）で、その後平成12年175a（5戸）、平成14年15ha（33戸）、平成15年36ha（81戸）と急速に拡大したことがわかりました。
- (2) クロタラリアを組入れた作付体系は、「春作ジャガイモ＋クロタラリア＋秋作ジャガイモ」（47%）

が最も多く、次いでレタスの間作（17%）、「その他＋クロタラリア＋秋冬はくさい」（11%）、だいこんの間作（7%）という順でした。

- (3) クロタラリアに期待する効果として上位にあげられたのは、「土壌改良効果」、「線虫抑制効果」でした。
- (4) 栽培してみてクロタラリアの効果に対する評価は、後作がジャガイモまたはレタスの農家では「土壌改良効果」をあげた人が比較的多く、後作がダイコンまたはハクサイの農家では「線虫抑制効果」をあげた人が比較的多いことがわかりました。
- (5) クロタラリアに関する情報の入手先は、農協担当者（36.4%）および普及員（29.9%）が特に高く、他の農家（14.3%）、役場職員（9.0%）、新聞等（5.2%）、その（5.2%）他の順でした。

場内だより

● 行事

12月28日：仕事納め式と永年勤続者の表彰が行われました。干拓科小林科長、愛野支場育苗栽培科中尾科長の2名は勤続25年の表彰を受けられました。
1月6日：仕事始め式が行われました。

● 視察来場

1月7日：農林部人材育成研修の17名が、施設、研究内容等の視察に来場しました。
1月12日：JAながさき県央いちご部会の76名の方が、イチゴ炭疽病対策の視察・研修に来場されました。
1月27日：有家町イチゴ婦人部会の40名の方が、イチゴ視察に来場されました。
2月21～25日：福建省農林技術考察団（林業科学院副院長 葉団長）の4名が来県され、県内農林業等の視察及び技術交流を行いました。

● 会議等の開催

1月5日：公設試企画担当者が長崎で開催されました。
1月11日：分野別研究課題評価委員会（農林）が開催され、15年度に終了する課題20課題（うち総合農林試験場は10課題）や継続課題9課題（うち6課題）について評価委員6名による検討・評価を受けました。
1月18日：連携分野課題評価委員会が長崎市で開催され、総合農林試も参加している3課題について評価等を受けました。
1月25日：諫早湾干拓農地保全型農業検討会が場内で開催され、干拓地における環境保全型農業のあり方について検討が行われました。
2月16日：対馬野菜生産振興大会で70名の生産者の方に、アスパラガスの生産安定技術とトマト黄化葉巻病の防除技術について、成果報告を対馬市豊玉町で行いました。
2月7日：分野別機関評価委員会（農林分野）が果樹試験場で開催され、当場の研究業務や技術サービス業務、運営全般について評価委員6名による評価を受けました。
2月15日：農林業バイテク推進連絡協議会（第2回）が場内で開催され、午後からはバイテク研修報告会瓦解祭され場外からの参加者も含め熱心な討議が行われました。
2月17日：分野別研究推進委員会が場内で開催され、新規課題、継続課題について評価委員9名の方から指摘指導を受け、研究方法等のブラッシュアップを行いました。
3月14日：第2回試験研究推進委員会が長崎市で開催され、連携プロジェクト研究の進捗状況等を報告し、指導・助言を頂きました。
3月15日～17日：農林試験研究推進会議部門別検討会を開催し、研究モニター9名を含む場外関係者104名の参加を頂き、成果情報の検討及び新規課題に対する要望等意見交換を行いました。

● 各種研修の実施状況

1月31日：東彼杵町総合会館でJA県央東彼杵茶業部会の農業者等150名の方を対象に、茶病害虫クワシロカイガララムシの環境保全型防除技術の実用化について、成果報告を行いました。
2月22日：大村市環境保全型農業推進協議会で、80名の生産者等を対象に、ニンジンの養分集積実態、減化学肥料栽培技術について講演しました。
3月4日：愛野町認定農業者協議会の30名が、土壌肥料科、野菜科、花き科での研修に来場されました。
3月5日：國學院大学博物館学研究室の35名の方が、研修の一環として来場され、農林資料館、農業技術展示館を視察見学されました。
3月14日～17日：JITCO外国人受入事業でパラグアイから来県している3名の研修生に対して、場内各科、各支場で技術研修を実施しました。



小林科長



中尾科長



福建省林業科学院



イチゴ視察・研修



課題評価委員会



分野別研究推進委員会